



NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

(2008年5月2日～2008年12月1日) No.59

- | | | | |
|---|---|----|--|
| 2 | 稲盛財団記念館竣工
Inamori Center completed | 10 | 第32回 東南アジアセミナー
「東南アジア世界の光と影」開催
The 32nd Southeast Asia Seminar on "The Dark and Light Sides of Southeast Asia" |
| 3 | 公募共同研究を開始
CSEAS seeking the collaborative research projects publicly | 12 | <受章・受賞> Award Winners
秋の叙勲で石井米雄教授が瑞宝重光章を受章
Emeritus Professor Ishii Yoneo
石川登准教授に第三回榎山純三賞
Associate Professor Ishikawa Noboru
米澤剛研究員に2008年日本情報地質学会論文賞
Researcher Yonezawa Go |
| 4 | 生存基盤科学研究ユニット
京滋フィールドステーション事業始まる
Shiga-site Project under Institute of Sustainability Science begun | 13 | 人事 Personnel |
| 5 | 拠点大学交流事業 共同研究 7
「グローバル化時代のアジア的社会運動の行方」
JSPS-NRCT Core University Program
"Asian Way of Social Movements in the Era of Globalization" | 14 | 広報ビデオ『道は、ひらける——石井米雄と東南アジア研究』制作
The Video Film "A Way is Paved Forward: Ishii Yoneo and Southeast Asian Studies" |
| | Joint International Workshop on
"Chinese Identities and Inter-Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia" | 15 | G-COE News
『三印法典——コンピューター総辞用例索引(改訂版)』出版
Computer Concordance of The Law of Three Seals, Revised Edition is published |
| 6 | シンポジウム「災害に立ち向かう地域/研究」
Symposium on "Area and Area Studies to Conquer Disaster" | 16 | Colloquia |
| | 地域情報学研究会「東西回廊を探る——アンコールからタイへの王道」
Area Informatics Workshop on "Exploring East-West Corridors: Living Ancient Road from Angkor to Thailand" | 17 | Visitors' Views |
| 7 | 「ラオスの自然と生業のダイナミクス」研究会
Seminar on "Cultivating Nature, Adapting to Nature: Dynamics of Lao Livelihood" | 20 | 私の地域研究論
My "Area Studies" |
| | CAPAS-CSEAS Symposium 2008
"Islam for Social Justice and Sustainability" | | <連絡事務所便り>
Letters from Liaison Offices |
| 8 | The International Symposium on
"Sulawesi Area Studies in 50 Years" | 22 | <東風南信> Reflections
チョコクロさんの想い出 山田 勇
"Memory of Tjokro san" by Yamada Isamu |
| | シンポジウム
「生のつながりへの想像力——再生産再考」
Symposium on "Imagination on Relatedness of Life: Rethinking Reproduction" | 23 | 東南ア研を離れるにあたって
Message from a member who has recently left CSEAS |
| 9 | G-COE International Symposium on
"Multiple Paths of Economic Development in Global History" | | 研究会報告
Report on Seminars |
| | 左京区連携による
「ぐるぐる写真のつくり方」ワークショップ
Workshop for Kyoto Citizens on "How to Create a Panoramic Photo You Can Travel Within" | 25 | 出版ニュース
Publication News |
| | | 26 | 図書室長期休室のお知らせ
Information on Prolonged Closure of the Library |





稲盛財団記念館

稲盛財団記念館竣工

▼上：松本紘・京大総長から稲盛和夫・稲盛財団理事長へ感謝状の贈呈
下：竣工披露会で入居部局を代表して地域研究について語る水野所長



木造であった東南アジア研究所北棟と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（AA研）南棟が、2008年秋、「稲盛財団記念館」として1つの鉄筋コンクリートの建物（地上3階、延床面積約6,000平方メートル）として生まれ変わった。南北に細長く、鴨川から眺めると、景観にみごとにフィットするスリムでかつモダンなデザインである。このすばらしい建物を京都大学に寄附して下さった

財団法人稲盛財団に心から感謝したい。とても広くなった建物内には、地域研究統合情報センター、アフリカ地域研究資料センター、およびこころの未来研究センター（心理学、認知科学、脳科学、人文科学等の統合的研究拠点）も同居することになった。さらに1階には、稲盛財団が提供する国際賞である「京都賞」に関する情報を紹介する「京都賞ライブラリー」、および京都大学が保有する歴史資料や映像資料を閲覧できる「研究資源アーカイブ映像ステーション」も設置されている。

稲盛財団記念館の中で、東南アジア研究所の占有スペースは建物の北端に位置する。1階には学术交流室および所長室、2階には東南亭と教員室（3名分）がある。かつて東南ア研が北棟で確保していたスペースのかなりの部分は、他部局と共同で使用するスペースの一部として供出された。共用スペースには、事務室、事務長室、マイクロフィルム保管庫、共通資料室、共通サーバー室、GISラボ、および合計4つの会議室が含まれる。東南アジア専攻のAA研大学院生を含め、かつて北棟に入居していた東

南ア研関係者の多くは、東棟、共同棟、および総合研究2号館（図書館分室）に分散して入居することになる。

10月31日正午から、竣工披露会が催された。松本紘・京大総長からは、「良い場所で良い研究を期待する」、稲盛和夫・稲盛財団理事長（京セラ名誉会長）からは「京都賞と京都大学の連携および一般市民が親しみをもって訪れる場所となることを期待する」というご挨拶をいただいた。しばしの歓談の後、東南ア研の水野広祐所長が入居部局を代表して挨拶をした。4名の教官と2名の事務職員からスタートした東南ア研は、今では4部局170名を擁するまでに成長し、稲盛財団記念館のある場所を中心に結集して、地域研究を実施するようになった経緯に関して熱弁を振るった。参加者に手渡された土産袋には、今回の工事で切り倒されたケヤキの大木から製作されたコースター（AA研の小林繁男教授の発案）と京セラ製のセラミックボールペンが入っていた。まさに時の流れを映し出すペア記念品である。

（文責：西淵 光昭）

「東南アジア研究所 公募共同研究」が始まる

今までも毎年10以上のさまざまな共同研究会を組織し、活発に運営してきた。ただし、研究会の開催場所がほとんど所内であったため、所内研究会とも通称されていた。この研究会を、あらためて名実ともに共同研究とするための規則変更を行

い、今年度より新たな枠組みで公募共同研究を開始した。具体的には、申請を公募とし、メンバーの半数以上を所員以外の者とするを明文化した。また講師等旅費の過半をこのために転用するほか、各自の個人研究費の一部を拠出して、合計300

万円の予算措置をとった。

また、研究所の重点研究領域と関連して、以下の五つの課題に関する申請が望ましいとした。採択された研究課題および代表者は、以下のとおりである。

(文責：清水 展)

公募の対象となる五つの研究課題

課題1	「東南アジア世界が直面している諸問題に取り組み、解決への方途を探る研究」 例 ① 文化多様性が支える「グローバル地域社会」の研究 ② 循環型資源利用による「脱化石資源社会」の研究 ③ 災害被害等を軽減する「リスク対応社会」の研究 など
課題2	「東南アジア研究の広域アジア化と地域概念の再検討に関する学際的・基礎的研究」
課題3	「本研究所の所蔵する資料（地図・画像資料、文献資料等）を利用した研究」
課題4	「NPO、NGO、行政などのスタッフとの社会連携による実践的研究」
課題5	「ジャカルタ連絡事務所・バンコク連絡事務所の施設を活用する国際共同研究」 (現地での研究会・シンポジウム等の開催、新規プロジェクト組織化のための研究連絡・準備等)

採択された研究課題と代表者

課題1	「アジアにおける大規模自然災害の政治経済的影響に関する基礎的研究」 「巨大災害に対する民衆の知恵——ミャンマー・イラワジ管区マウービン郡の村落における事例研究」 「東南アジアの『消滅に瀕する焼畑』に関する文化生態的研究」	西 芳実 (東京大学大学院総合文化研究科・助教) 林 泰一 (京都大学防災研究所・准教授) 横山 智 (熊本大学文学部・准教授)
課題2	「アジア農村社会構造の比較研究——権力統治下の村落形成」 「アジアにおけるインフォーマル経済とグローバル・バリュー・チェーン」	藤田 幸一 (東南アジア研究所・教授) 遠藤 環 (埼玉大学経済学部・専任講師)
課題5	「東南アジアにおけるインフォーマルな越境移動からみた地域再編の研究——バンコク連絡事務所を拠点とする日タイ間の若手学術交流を中心に」	片岡 樹 (大学院アジア・アフリカ地域研究科・准教授)

生存基盤科学研究ユニット

京滋フィールドステーション事業始まる

東南アジア研究所は2008年度に「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」プロジェクトを、生存基盤科学研究ユニットのサイト機動型研究の一つのコンポーネント、京滋フィールドステーション事業として立上げた。このプロジェクトは滋賀県立大学、京都学園大学、NPOプロジェクト保津川、美しい湖国（NPOもやいネット）、NPO市民環境研究所、火野山ネット、守山市、亀岡市、高島市などの諸団体と地元の皆さんと一緒に地域の問題を考え行動する地域研究である。

準備期間を経て、1名の特任助教、6名の特任研究員のスタッフを揃え2008年10月からフィールドでの活動を開始している。具体的な実践型地域研究の場として滋賀県の朽木、守山、京都府の亀岡にフィールドステーション(FS)を設置した。在地(現場にいる)の自覚を大切に、対象を外から観察するだけでなく、実践に参加することで、内側から問題

を把握し解決の方策を地域の皆さんと一緒に考える研究手法をとっている。朽木FSでは、「水と火のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり」、亀岡FSでは「筏をシンボルとした人・山・川・町(都市)のつながりの再構築」、守山FSでは「琵琶湖の漁業と食文化の復興」など、FS担当の研究員を中心に、地元住民・NPO・地方自治体との協働による実践的な研究活動に取り組んでいる。生存基盤科学研究ユニットに参加している、「理(自然科学)」を柱とする他の京都大学の四つの研究所(化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所)との連携研究において、文理融合による海外での地域研究を実施してきた東南アジア研究所は異質であるが故に、期待されている存在となっている。生存基盤科学研究ユニットは、従来の学問的な枠組みにとらわれず自由な発想に基づいて人類の生存のための科学を目指して結成された組織である。本事業はこの

ユニットのサイト機動型研究の一つの柱として、これまでの海外での研究で蓄積された知見を日本の社会にいかし、かつ、海外との連携研究活動に積極的に反映させていく展望をもって実施している。

本事業は、毎月第4金曜日の16:00～18:00を原則に守山FSにおいて開催する月例研究会と、2008年10月1日付で東南アジア研究所情報ネットワーク部に設置された実践型地域研究推進室を発行者とする実践型地域研究ニュースレター(www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/) (2008年11月が創刊号)を柱として開かれた研究を目指している。実践型地域研究である本事業は東南アジア研究所の新たな試みであり、皆様のご理解とご参加、ご協力を切にお願いいたします。(この紹介文は、『実践型地域研究ニュースレター』No.1所収の水野広祐東南アジア研究所長・プロジェクト代表による「地域の人々との協働による実践型地域研究の試み」を参照したものである。)

(文責：安藤 和雄)

▼「保津川筏復活プロジェクト2008」。亀岡市保津小学校の生徒たちによる筏組み体験の様様



▲高島市・棕川で萱原の火入れ。竹のたいまつに種火を移す



▲琵琶湖でのエリ漁の風景。この日一つのエリに集まった魚は約100kg、そのうち90kgは外来魚

JSPS-NRCT Core University Program

“Asian Way of Social Movements in the Era of Globalization”

社会運動と変化するガバナンスの領域は、本事業の共同研究7「東アジアを拓く人達——新しい東アジア政治経済・社会・文化モデル構築」のサブテーマの一つとして、非常に重要な位置を占めている。2008年6月14日に開催されたミニシンポジウム「グローバル化時代のアジア的社会運動の行方」では、タイのチュラーロンコーン大学からナルモン・タバチュンポン氏、タマサート大学からナリニー・タントウワニット氏、

ブーンラート・ピセートプリチャー氏、クリサダー・ブーンチャイ氏の4名を招き、これに当研究所の水野広祐を加えた5名が発表を行った。都市のスラム住民や、ダム建設の影響を被った人々による運動の経緯と現状、農村における資源へのアクセス獲得のための新しい戦略と方向性、タイ社会運動における「文化」の戦略的利用についての研究発表に関して、参加者の間で活発な議論が行われた。

上記4氏は、NGOや草の根の政治活動が及ぼす影響について、タイの様々な社会運動を事例として学術的に研究すると同時に、タイ社会運動の「企業家」としても重要な役割を果たしている。今後も彼らと緊密な連携を図りながら、グローバル化する東アジアにおける新しい政治経済・社会・文化モデルの構築という共同研究の目標に向け、活動を続けていきたい。

(文責：生方 史数)



Joint International Workshop

“Chinese Identities and Inter-Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia”

“Chineseness” in various colonial and national arenas in Southeast Asia over time. “Chinese” everyday life, ascription, and self-identification in Southeast Asia have been shaped by transnational migration, by colonial and national states and their projects of modernity, by global capitalism, and by discourses of “Chineseness.” The historically problematic status of the Chinese — variously defined as economically dominant, political subversive, and culturally different — has been a source of ethnic tensions, principally expressed through economic nationalism, political disenfranchisement, assimilation-integration debates and campaigns, and (as in the case of Indonesia) riots and outright violence. Yet “Chinese” identities have been far more complex, multiple, and

protean than is presupposed by either scholarship or public policy or popular imagination. With the rise of China and East Asian (both Northeast Asia and Southeast Asia) regional growth and integration, “Chineseness” has been reconfigured in line with changes in state policy, the popularity and impact of “overseas Chinese” studies, and the vicissitudes of globalization. The 10 papers presented at the workshop highlighted, through a focus on Indonesian Chinese in comparative regional perspective, the ongoing reworkings and negotiations of “Chineseness” and the challenges they pose for inter-ethnic coexistence and cooperation in Southeast Asia.

(Reported by Caroline S. Hau)

The CSEAS-Netherlands Institute for War Documentation Joint International Workshop on “Chinese Identities and Inter-Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia” was held on July 4-5, 2008, at the CSEAS, Kyoto University. This workshop aimed to historicize the lived experience of “being Chinese” in Southeast Asia by looking at how economic, political, cultural, and ideational processes have contributed to defining, producing, and reworking

「災害に立ち向かう地域／研究——

生存基盤持続への寄与をめざして」



本シンポジウムを、G-COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の若手研究者養成部会とイニシアティブ4、および清水が代表を務める萌芽科研「防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を

目指して」との共催で、7月11日と12日の2日間にわたり開催した。助教・研究員らが個別具体的な研究成果を報告し、それらにもとづき、災害（防災／減災／復興）に積極的にかかわり被災地域の生存基盤の持続に寄与することをとおして、地域研究が新たな展開をしてゆく可能性について議論した。

第1日目は、清水の趣旨説明と基調報告「生存基盤が壊れるということ」の後、「突発的に起こる災害」というテーマで、西芳美が「災害に強い社会を考える」、遠藤環が「都市のリスクと人々の対応」、木村周

平が「地震の不安と地域社会」を報告し、国立民族学博物館の林勲教授からのコメントと総合討論を行った。第2日目は、「漸次進行する災害と生存基盤」というテーマで、甲山治が「温暖化および気候変動にどう対応するか?」、佐藤孝宏が「農業水利変容とその影響」、生方史数が「塩と共に生きる?」、西真如「ウイルスと民主主義」、山本博之が「自然災害で現れる『地域のかたち』」を報告し、総合地球環境学研究所の門司和彦教授のコメントと総合討論を行った。

(文責：清水 展)

地域情報学研究会

「東西回廊を探る——アンコールからタイへの王道」

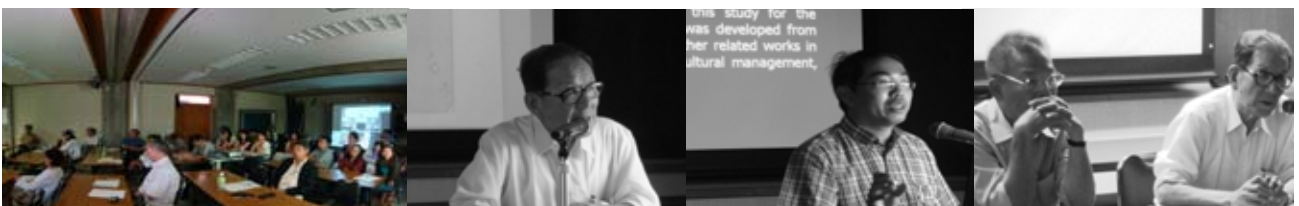
1992年に世界遺産に登録されたカンボジアのアンコール遺跡は、9～14世紀半ば頃までその地に存在したひとつの政治権力の証拠である。壮大な伽藍と精巧な浮彫りを特徴とする同時期の遺跡群は、カンボジア、ラオス南部、タイ東北部までの広い範囲に広がり、それを作り上げた政体について多くの関心と呼んできた。ただし、碑文資料にもとづく古典的研究では、遺跡を作り上げた権力の実態がよくみえてこない。タイの Surat Lertlum 氏（東南アジア研究所外国人研究員）は、アンコール遺跡からタイのピーマイ遺跡に向かって伸びる王道（Royal Road）

に関心を寄せ、地表に残された遺物を広範囲に踏査し、地形や生態条件などと共に空間情報として整理する手法で、当時の同地域の歴史世界を再考するプロジェクトを行っている。

しかし、フィールドの生態環境や地理条件に着目し、文献史学が定説としてきた標準的な理解を覆そうとする試み自体は、「地域研究としての歴史学」の立場から行われて久しい。そこで、この視点の先駆者である石井米雄教授を招待し、地域情報学による歴史研究の可能性を再検討する研究会を7月17日に開催した。当日は、タイ中部スコタイで

13～14世紀に栄えた政体の権力基盤について、それがインド洋と南シナ海を結ぶ東西交易ルートの拠点に位置した可能性を指摘する石井米雄教授の講演の後、Surat 氏より、アンコール王朝期の王道に関する調査報告を受けた。その後、Surat 氏のプロジェクトにカンボジア側から参加する Ang Choulean 氏（東南アジア研究所外国人研究員）、および遠隔ビデオ会議の回路で結んだタイ・シラパコーン大学考古学部からも質疑を受け、フロアに参集した院生・研究者とともに活発な議論が行われた。

(文責：小林 知)





「ラオスの自然と生業の ダイナミクス」 研究会

◀ラオス北部のゴム園

焼畑での陸稲栽培に代わって、中国へ輸出されるゴム生産が急激に拡大している。
土地利用や農業のみならず、人々の生活が変革しようとしている。

この10年ほどで、ラオスの自然、生態、生業に関する研究は急速に進展した。その成果が、今年になって、相次いで出版されている。『論集モンスーンアジアの生態史』（秋道智彌監修、弘文堂、2008年）や『ラオス農山村地域研究』（横山智・落合雪野編、めこん、2008年）、『ヴィエンチャン平野の暮らし——天水田村の多様な環境利用』（野中健一編、めこん、2008年）などである。2008年7月19～20日に

東南アジア研究所にて開催した本研究会では、その成果を共有するために、これらの論考を発表された方々に話題提供していただいた。また、これらの成果を国際的に発信するとともにラオス社会に還元するための英文出版に関する構想をとりまとめた。話題提供者は、富田晋介（東京大学）、武藤千秋（岐阜大学）、小手川隆志（高知大学）、横山智（熊本大学）、広田勲（京都大学）、中田友子（神戸市立外国語大学）、高井康

弘（大谷大学）、野中健一（立教大学）、池口明子（横浜国立大学）、西村雄一郎（愛知工業大学）、中村哲（国立国際医療センター）、翠川裕（鈴鹿医療科学大学）、百村帝彦（地球環境戦略研究機関）、宮川修一（岐阜大学）、Linkham Douangsavanh、Nathan Badenoch（以上、National Agriculture and Forestry Research Institute）である。

（文責：河野 泰之）

CAPAS-CSEAS Symposium 2008

“Islam for Social Justice and Sustainability: New Perspectives on Islamism and Pluralism in Indonesia”

昨年より、東アジアにおける東南アジア研究とのネットワークを拡充すべく、台湾中央研究院亞太區域研究專題中心（CAPAS）と毎年共同シンポジウムを開催しているが、2年目に当たる今年度は、インドネシアにおけるイスラームに関するテーマを掲げ、また台湾、日本のみならず、インドネシアからも専門家を招き、9月16、17日の2日間にわたり京大会館において開催した。ナフダトゥール・ウラマー幹部会のトップの一人 Masdar Farid Masudi 氏の基調講演に続き、Session 1:

Mapping Indonesian Islam, Session 2: Islam in Historical Perspective from Banten Area, Session 3: Gender and Pluralism in Indonesian Islam, Session 4: Diversities in Indonesian Islam, Session 5: Islam and Health in Comparative Perspective の五つのセッションの下、14の報告がなされ、活発な議論が展開された。来年度は10月頃に台湾で開催される予定である。

（文責：小泉 順子）



“Sulawesi Area Studies in 50 Years: In Search of Its Identity and Local Systems”



▲上：田中耕司氏（CIAS）による基調報告
下：ワークショップ終了後の記念撮影

本ワークショップは、2008年10月11日にハサヌディン大学総合研究棟3階において行われた。目的は、これまでスラウェシ地域研究に長く携わってきた田中耕司（CIAS）やダダン（ハサヌディン大学）などが同地域研究の歩みを振り返り、それ

と同時に、スラウェシ地域研究の諸プロジェクトに携わってきた若手研究者が研究報告を行うというものであった。若手としては、G-COEプログラムや本ワークショップを共催したITP事業などでスラウェシにおいてフィールド調査や現地語習得を行ってきたASAFASの大学院生、岩田、竹安、西嶋、古川がそれぞれの研究成果や計画について発表を行った。岡本（CSEAS）の他、ハサヌディン大学からの講師も含めて19名が研究成果を発表した。

報告者のテーマは多様性に富んでおり、地域住民による自然資源管理、沿岸海域における環境変動にともなう人間活動の動態、経済変容にともなう地域住民の生存基盤確保の動態、カカオ産業と地域社会、スラウェシ地域における政治動態、地方自治

体の分離分立運動、分権化の時代における地域アイデンティティの変容など、現在のインドネシア、とりわけスラウェシにおいて重要かつ生存基盤を考える上で不可欠なものばかりであった。

本ワークショップは、東南アジア研究所へ客員研究員として招聘されたことのある研究者や京都大学OB・OGによる周到な事前準備のもと、ハサヌディン大学側の全面的な支援を得て実施された。当日は、京都大学関係者のみならず、文化学部日本語学科の学生や一般の聴衆なども来場し、参加者は70名ほどを数えた。これらの聴衆から積極的なコメントや質問を受けたことは意義深いことであった。

（文責：岡本 正明）

シンポジウム

「生のつながりへの想像力——再生産再考」

「再生産」ということばは、生物学的な再生産すなわち生殖を指し示すとともに、経済学的な財や労働力の再生産、そして文化や社会システムの再生産に至るまで、幅広い問題領域に関わる概念である。伝統的な人類学研究においては、社会構造の再生産の問題を「親族理論」として把握することが通例だった。しかし伝統的な「家族」ないしは「親族」の枠組みを自明のものとする見方に対して、フェミニズムや政治学といった領域からさまざまな疑問が提起されるようになると、人類学的な「親族理論」も大きく揺らぐことになった。そして私たちは、「再生産」の問題を統一的に把握する方法を失っ

てしまったようにも見える。

2008年11月4日に開催されたシンポジウム「生のつながりへの想像力——再生産再考」では、従来の親族研究の枠組みでは捉えられない、新生殖医療、国際結婚、同性愛家族、少子高齢化といった問題群に関する報告が行われた。「生（いのち）のつながり」ということばには、人と人との関係性（relatedness）という意味が込められている。生殖をめぐる技術が急速に進展する一方で、私たちは何ら共有すべき価値観を持っていないように思えることもある。こうした中で、社会としてあるいは人として何を継承すれば良いのかという問題を、「生のつながり」とい



うキーワードで、いまいちど統一的に把握することは可能なのだろうかという問いかけは、非常に魅力的なものであるように思われる。

（文責：西 真如）

“Multiple Paths of Economic Development in Global History”

グローバル COE は、主要国を代表する経済史家約 20 名が国際経済史協会 (IEHA) の理事会に出席するために京都に集まる機会を利用して、大阪大学を拠点とするグローバル・ヒストリーの研究グループ (代表: 秋田 茂氏) との共催で国際シンポジウムを開催した。経済史の学界にとっての重要性に鑑み、日本学術会議経済学委員会 IEHA 分科会、および経済史関係の三つの主要学会である社会経済史学会、日本経営史学会、政治経済学・経済史学会の後援を得るとともに、これらの学会の中心メンバーにも参加していただいた。

シンポジウムは、竣工したばかりの稲盛財団記念館で、11月8-9日の両日、約60名の参加を得て開催された。「グローバル・ヒストリーにおける複数経済発展径路」と

題し、西洋の発展径路が世界に普及したとする単線型史観、東アジアには別の長期発展径路が存在し、第二次大戦後西洋型径路との融合によって「東アジアの奇跡」が起きたとする「二径路融合説」のいずれにおいても後景に退いている、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの熱帯地域の長期発展径路も視野に入れて、グローバル・ヒストリーを「複数経済発展径路」の観点から書き直そうとする試みが示され、大きな関心を引いた。こうした発想がグローバル COE で展開されてきた議論を前提としていることは言うまでもない。2009年8月にユトレヒトで開催される「世界経済史会議」でもさらに議論が続けられることになる。

(文責: 杉原 薫)

▼③左から秋田茂教授(大阪大学)、杉原薫教授(京都大学: 現国際経済史協会理事: 以上2名が本シンポジウムのオーガナイザー)、ユリ・ペトロフ教授(ロシア)、カースティン・マンセル氏(ドイツ)



▼①集合写真 2008年11月8日 第一日目の会議を終わったところ



▲②ヤンルイテン・バンザンデン教授(オランダ: 国際経済史協会副会長で、次回ユトレヒト会議のオーガナイザー)

▲④リチャード・サッチ教授(アメリカ合衆国: 国際経済史協会元会長) 白沙村荘 橋本関雪記念館での懇親会にて ⑤リッタ・ヘルツベ教授(フィンランド: 国際経済史協会会長で、前回のヘルシンキ会議のオーガナイザー) ⑥斎藤修教授(一橋大学: 前国際経済史協会理事)と速水融教授(日本学士院会員: 元国際経済史協会理事)

左京区連携による「ぐるぐる写真のつくりかた」ワークショップ



▲パノラマ写真ワークショップポスター

撮りたいものが画面におさまりきらず困ったことはないだろうか。自分が体験したその場の雰囲気や伝えようにも写真とともに百の言葉を尽くしてもうまく伝わらないと感じたことはないだろうか。写真をめぐるこのようなもどかしさを解決する技術手法について、2008年11月24日、市民向けワークショップを開催した。「左京区 大学と地域の相互交流促進事業」として東南アジア研究所と左京区の協力のもと京都市の後援をいただき、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールにて実施した。ワークショップの内容は、市販デジタルカメラだけで可能になる

「その場をまるごと」を記録し再現するための手軽で機動性の高い手法についてである。「百文」を一見で伝えるこの写真技法は、複数撮影とパソコンでの後処理からなる。複数写真の自動パノラマ合成、マウスの操作で写真内を自由に見渡せる QuickTimeVR 映像の自動生成と2段階のステップで超高精細静止画と映像の2種類の出力を得られる。益田による原理説明と実演のあと、20名ほどの市民参加者が実習形式で技法を習得した。参加者からは「機械が苦手な私でもこれなら今日から使える！」と好評だった。

(文責: 益田 岳)

第32回東南アジアセミナー

『東南アジア世界の光と影』開催

「東南アジアセミナー」は今年度で32回目となった。今年度のテーマは「東南アジア世界の光と影」であり、大学一年生から社会人まで受講生21名で9月1日から5日にかけて開催した。その目的は、東南アジア世界が実現してきた成長と繁栄という光の側面を照らし出す一方で、その裏側で東南アジアが直面している社会・政治・公衆衛生などの局面における主要な問題を取り上げ、各国家がいかに対応しているかについて検討することであった。

最初の三日間は、「総論 — 不安定な地域と生態環境の破壊」「不安定な政治」「人のフローと感染症の拡大」というトピックで毎日3人の講師がプレゼンテーションを行い、そのあとにトピックに関連するビデオ

上映を行った。タイの政情が緊迫度を増していたことから、三日目の朝には急遽、玉田氏（ASAFAS）にタイ政治分析についての講演を行ってもらった。四日目は、人身売買、貧困、民主化、森林伐採という四つのテーマに基づいて受講生をグループ分けして、若手研究員やセミナー実行委員が支援する形で各グループが図書館での資料収集とその資料の分析を行った。そして、五日目に各グループが発表を行った。

二つのことが印象に残った。一つめは、三日目に上映されたビデオで、祖母の健康を気遣いながら日本で介護士になることを目指して介護学校に通うフィリピン人青年の話である。非常に素直に祖母を気遣う青年の姿、祖母の死を悼む青年の姿に受

講生の多くが涙しており、ビジュアルな情報の持つ影響力を再認識させられた。二つめは、四日目のグループ発表の準備である。受講生の中には学部生も多く、これほど真剣に文献を読んで発表する準備をしたことがなく、大変な一方で勉強することの楽しさを学べて良かったとの声が聞かれた。確かに、どのグループも夜遅くまでプレゼンテーションの資料作成に明け暮れており、その意気込みにはセミナー実行委員も驚かされるほどであった。社会人として参加して下さった方も、こうした学部生の意気込みに負けないぐらい一生懸命発表準備をしてくださっていた。

受講生をグループ分けしてプレゼンテーションをしてもらうというのは、主体性の一部を受講生に委ねることから結論が見えにくく、セミナー開始前には実行委員会の間で不安はあった。しかし、今回について言うなら、受講生の意気込みが予想以上に高く、やはり受講生の主体的参加型セミナーは面白いというのが終了後の委員全員の思いであった。

(文責：岡本 正明)



「旅」としての東南アジアセミナー

青山 和佳

東南アジアセミナーの応募締切のころ、行き詰まっていた。学生時代から追っていたテーマの研究（フィリピンの貧困）が一段落するとともに、日々の業務で時間が細切れになっていく中で何とか研究を続けなければと焦っていたのです。京都への転地はうってつけの機会でした。2008年度はセミナー実行委員の先生方の大半がフィリピン研究者だったことも、経済学育ちの私には魅力的でした。

セミナーの開催に先立ち、A4のフォルダー1冊にぎっしりとリーディング・キットが届きました。様々なバックグラウンドをもつ22名の受講者リストのほか、第一線で活躍する研究者による講義のプログラムも添えられていました。プログラムをよく見ると3日目ま

でしかありません。残り2日間は参加者によるグループ調査とその報告・討論が締めくくりとして行われるからです。京都に出かける準備をしながらワクワクしました。

セミナーが始まってみると、さまざまな思いがけない出会いから新しいことを学び、自分自身と改めて出会う旅となりました。例えば、「東南アジア世界の光と影」というテーマの下で政治、人の移動、貧困、感染症、環境など複数の問題を追うという大胆な見取り図や、それらの個々の問題に合わせて様々な分析道具を組み合わせていく実践を目の当たりにし、研究者としての自分自身のフレーミングにもっと幅を持たせる必要性を感じました。

日常生活ではありえない経験として、

学部生3名と一緒に全く同等の立場でグループ・ワークをさせて頂いたことも挙げられます。アドバイザーの支援の下、休憩室のテーブルを囲んで皆で地道に文献を読み解き、それぞれ帰宅した後も携帯メール(!)をやりとりしながら深夜まで作業に励みました。一人ひとりの学びの可能性に喜びつつ、教員としての自分の役割について反省できたことは予想外の収穫でした。

5日間みっちり共同作業をするとラーニング・コミュニティも形成され、セミナー終了後も続くつながりにも恵まれました。この旅での経験と思い出は、これから先、研究や教職を続ける上でもわたしを支えてくれることでしょう。ありがとうございました。

(日本大学生物資源科学部 国際地域開発学科 准教授)



今年の東南アジアセミナーでは「東南アジア世界の光と影」というテーマでしたが、講義内容で見れば比較的「影」の部分について触れられていたと感じました。東南アジアは現在あるいは将来的に重要な市場として経済発展している地域であると考えていた私にとっては、マフィアや人身売買、新型インフルエンザなど、東南アジアを取り巻く問題が想像以上に根深いものであり衝撃的でした。

しかし、セミナーが終わった今、私は「影」の部分を知ることができて良かったと思っています。もし「影」を知ることができなかったなら、私は東南アジアという地域を短絡的に楽観視していたと思います。あくまで経済発展やASEANによる域内経済協力の進展などだけを見てしまったと思います。

「東南アジアセミナー」に参加して

青松 功志 いさし

しかし、それらが円滑に進められるためには、その国では今どんな政治体制であるのか、互いの国々の関係性はどのようなのか、文化・歴史を持っているのか、今国民の生活環境はどうであるのかなど、その国が抱える様々な問題を考え、解決していくことが重要であり、その事を学ぶことができたと思います。

そして、「影」の部分を知り、それを解決することは「光」につながっていくと思います。「光」だけを見て、「影」を無視することは本当の意味での「光」にはならず、むしろ「影」の力を強めていくのではないのでしょうか。しかも

その「影」は、例えば新型インフルエンザの発生や違法ドラッグの生産など、東南アジアだけに限定された問題ではなく、日本にも関係する問題であります。ひょっとすると、東南アジアの「影」の問題を放置したがために、日本にとっても大きな問題となるかもしれません。セミナーに参加して、私は常に東南アジアの現状と問題を見つめ、その上で今自分に何ができるのか、自分は何をすべきなのかを考え、より多様な分野を学習し、解決の手がかりを求めています。思うようになりました。

(大阪市立大学法学部一回生)

受章・受賞

秋の叙勲で石井米雄教授 が瑞宝重光章を受章



1985年から4年間所長を務められた石井米雄教授（京都大学名誉教授、現在、アジア歴史資料センター長）が平成20年度秋の叙勲において瑞宝重光章を受章された。このたびの栄誉は、石井教授の東南アジア研究センター（現研究所の前身）をはじめとする長年にわたる学界および教育界における指導的な活躍がもたらしたもので、本研究所にとっても誠に喜ばしいことである。

石井教授は、東南アジア研究センターの官制化直後の1965（昭和40）年7月に着任され、1990年4月に上智大学アジア文化研究所に転任されるまで、タイ国最古の成文法典である『三印法典』、上座部仏教の政治社会学、タイ国の村落構造や稲作社会の動態的な研究の分野で先駆的業績をあげられ、文理協働による東南アジア地域研究を定着せしめる上で貴重な貢献をされた。また、東南アジア研究センターを学際的な総合地域研究の拠点とするために、タイ語のチャラット・コレクションなど現地語資料の収集とカタログ化を促進され、東南アジア諸語文献研究部門を新設するなどの研究組織の充実と地域研究の発展に貢献された。

石井教授は、1995年に紫綬褒章を受章され、2000年には文化功労者として顕彰されている。また、2004年4月から2008年3月まで大学共同利用機関法人人間文化研究機構の機構長として活躍された。

石川登准教授に 第三回榎山純三賞

石川登准教授の『境界の社会史—国家が所有を宣言するとき』（京都大学学術出版会「地域研究叢書」17）が栄えある第三回榎山純三賞に輝いた。本賞は、財団法人榎山奨学財団が創立30周年を迎えるにあたり、社会科学分野の現代アジア研究における独創的で優れた業績を顕彰するため設けられたものである。第三回は、2007年4月から2008年3月末までに刊行されたアジア全域を対象とする著作のうち推薦・応募等による図書45冊の中から、石川准教授と野村資本市場研究所シニアフェローの関志雄氏の二作品が選ばれた。

表彰式は、11月11日に東京のホテルニューオータニにて多数の出席者を得て執り行われた。本書は、国境と村境が重なりあうボルネオ西部、現インドネシア/マレーシア国境村落における長期フィールドワークと詳細な植民地史料の分析を通して、国境と国家空間の形成過程を記述・考察したものである。受賞理由によれば、本書は「植民地国家行政の中心からのオフィシャル・ナショナリズムを柱とするベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論に再考察を迫る」とともに、「アジア研究とアジア研究を越える領域に独創的な貢献」であり、「グローバリゼーションを視野に入れた考察は、新しいアジア地域研究の創生と文化人類学の再



▲表彰式にて。右より選考委員・平野健一郎氏、石川准教授、榎山奨学財団・亀岡エリ子理事長

生の可能性を示す」ものとして高く評価された。本書の英語版 *Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland* も、東南アジア、ヨーロッパ、北米の出版社の共同出版というかたちで近刊予定である。

米澤剛研究員に2008年 日本情報地質学会論文賞

米澤剛研究員（東南アジア研究所特任研究員）が2008年日本情報地質学会論文賞に輝き、札幌で開催された第19回日本情報地質学会総会・講演会（2008年6月12～13日）において表彰された。受賞論文は『断層を含む地質構造の表現方法』（2005）である。

この論文では、断層運動による地質構造の変化を離散数学の概念を用いて定式化し、3次元地質モデリングと呼ばれるコンピュータ処理方法にこれまで表現することができなかった断層運動を新たに追加した。これは多数の断層を含む複雑な地質構造に対する3次元モデリングの基礎理論とアルゴリズムを開発・確立する上で画期的な成果である。この成果は、災害防止、環境保全、資源開発などの応用分野における地質情報の有効活用を促進する上でも大きく貢献するものと期待されている。

米澤研究員は現在、ベトナムのハノイの地形変化に着目した都市変容の解明を進めている。ハノイは埋め立てによって発展した都市であるため、ボーリングデータなどの地質情報を用いた解析が有効である。ハノイの地質構造は断層構造ほど複雑ではないが、米澤研究員の提案する3次元モデリングによりハノイの地質構造がもうすぐ解明されることであろう。これはハノイの都市形成過程を解明するだけでなく、将来的な生存基盤を確立する上でも重要な研究である。



人事

教員人事

<国内客員部門>

任期 2008 年 8 月 1 日～2009 年 3 月 31 日



脇村 孝平 教授

(2008 年 8 月 1 日付)

1978 年大阪府立大学経済学部卒。80 年同大学大学院経済学研究科前期博士課程修了、89 年同大学院後期博士課程単位取得退学 (2002 年同大学博士号取得)。90 年同大

学経済学部助手、92 年同学部助教授、98 年同学部教授。

[主要著書・論文]

『飢饉・疫病・植民地統治——開発の中の英領インド』名古屋大学出版会, 2002. ▽『疾病・開発・帝国主義——アジアにおける病気と医療の歴史学』(共編著) 東京大学出版会, 2001. ▽「国際保健の誕生——19 世紀におけるコレラ・パンデミックと検疫問題」遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの最前線——現在と過去のあいだ』東信堂, 2008.

<特任助教>



鈴木 玲治 助教

(2008 年 10 月 1 日付)

1994 年京都大学農学部卒。96 年同大学大学院農学研究科修士課程修了、2004 年同大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究指導認定退学 (05 年同大学博士号

取得)。1996～2001 年(株)関西総合環境センター勤務、04 年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手、07 年同大学院同研究科助教、08 年 10 月京都大学生存基盤科学研究ユニット助教。

[主要論文]

鈴木玲治; 竹田晋也; フラマウンテイン. 「焼畑土地利用の履歴と休閑地の植生回復状況の解析——ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑の事例」『東南アジア研究』45(3), 2007. ▽ Reiji Suzuki; Shinya Takeda; and Hla Maung Thein. Chronosequence Changes in Soil Properties of Teak (*Tectona grandis*) Plantations in the Bago Mountains, Myanmar. *Journal of Tropical Forest Science* 19(4), 2007. ▽ Reiji Suzuki; Shinya Takeda; and Saw Kelvin Keh. The Impact of Forest Fire on the Long-term Sustainability of Taungya Teak Reforestation in Bago Yoma, Myanmar. *Tropics* 14(1), 2004.

<客員研究員>

任期 2008 年 10 月 16 日～2009 年 3 月 31 日

相沢 伸広

ジェットロ・アジア経済研究所研究員

外国人研究者人事

◆外国人研究員

George Bryan Souza (アメリカ合衆国)。テキサス大学サンアントニオ校准教授。2008 年 6 月 1 日～11 月 30 日。「銀圏化とその波紋——近世アジアにおける海上貿易、貨幣取引のネットワークの拡大をめぐる」

Thung Ju Lan (インドネシア)。インドネシア科学院上級研究員。2008 年 7 月 1 日～12 月 31 日。「ポスト・スハルト期の華人系インドネシア人の中での中華アイデンティティと文化の模索」

Li Tana (オーストラリア)。オーストラリア国立大学太平洋アジア研究所シニアフェロー。2008 年 9 月 1 日～2009 年 2 月 28 日。「ベトナム戦争期南ベトナムにおける華人、1945-75」



Oekan S. Abdoellah (インドネシア)。バジャジャラン大学社会政治学部教授。2008 年 10 月 16 日～2009 年 4 月 15 日。「生存圏構成要素としての伝統的アグロフォレストリー」



Tatik Saadati Hafidz (インドネシア)。フリーコンサルタント。2008 年 10 月 16 日～2009 年 2 月 28 日。「テロ対策のための ASEAN 地域間協力——評価と提言」

◆招へい外国人学者

Muhammad Salim (バングラデシュ)。バングラデシュ農業大学栽培学科教授。2008 年 6 月 1 日～8 月 31 日。「草の根農法——バングラデシュの伝統農具」

Rufa Cagoco Guiam (フィリピン)。ミンダナオ州立大学平和開発研究所所長。2008 年 7 月 1 日～12 月 30 日。「人間の安全保障とジェンダー政策、およびそれらの国家意識と平和構築に及ぼす影響——日本・タイ・マレーシアの比較研究」

Rahman Md. Mizanur (バングラデシュ)。シンガポール国立大学社会学部研究員。2008年8月25日～10月25日。「東アジアと東南アジアにおける国際移民のもたらすもの」

Ukrist Pathmanand (タイ)。チュラーロンコーン大学アジア研究所教授。2008年9月1日～2009年6月30日。「タイ・インドネシア・日本における非伝統的安全保障と多国間主義——地域安全保障制度の変化につながるか?」

Susanne Rodemeier (ドイツ)。パッソウ大学講師。2008年9月15～19日。「日本におけるインドネシア研究」

◆外国人共同研究者

Rosa Babel Calilung (フィリピン)。フィリピン大学ディリマン校都市・地域計画。2008年5月6日～10日。「快適で持続的な都市づくりのための地方行政イニシアティブ調査——東京とマリキナ (フィリピン) の比較」

Dao Minh Truong (ベトナム)。ベトナム国立大学天然資源環境研究センター研究員。2008年6月6日～8月28日。「ベトナム北部山地における過去50年間の土地・森林資源と人々の相互作用に関する研究」

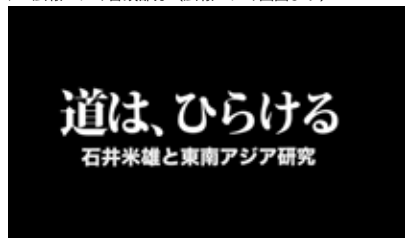
Shanthi Thambiah (マレーシア)。マラヤ大学人文社会科学部准教授。2008年9月1日～12月31日。「出生率の低下と愛情表現の変化——日本とマレーシアの比較研究」

Hidayat Herman (インドネシア)。インドネシア科学院社会文化研究センター研究員。2008年11月28日～2010年11月27日。「熱帯における持続的な人工造林——生態、経済、政治研究の融合」

◆事務職員人事

田代隆之教務掛事務職員は、兵庫教育大学総務部財務課財務企画チームより転入 (8月1日付)。

▼ 広報ビデオ冒頭部分 (広報ビデオ画面より)



広報ビデオ

『道は、ひらける——

石井米雄と東南アジア研究』制作

(<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/inamori/archive/index.htm/>)

2008年10月31日にオープニングを迎えた京都大学稲盛財団記念館1階に、新たに京都大学の「研究資源アーカイブ映像ステーション」が開設された。この研究資源アーカイブは、京都大学で生み出されてきた幾多の研究資源、すなわち写真・映像、音声、フィールドノート、実験・観測データなどの資料をデジタルで蓄積・保存し、教育・研究資料として活用すると共に、映像ステーションで一般に公開する施設である。東南アジア研究所からは、映像番

組「道は、ひらける——石井米雄と東南アジア研究」(上映時間13分42秒)を出演した。研究所としては、初めて制作した広報向け映像番組である。番組では、東南アジア、とりわけタイの研究に人生を捧げてきた石井米雄教授の50年の研究活動を振り返りながら、1963年に誕生した京都大学東南アジア研究センター(現研究所)が世界的に類をみない地域研究機関へ飛躍した足跡をたどる。地域に根ざし、現地語を覚え、文理協働で地域研究を行うことの重

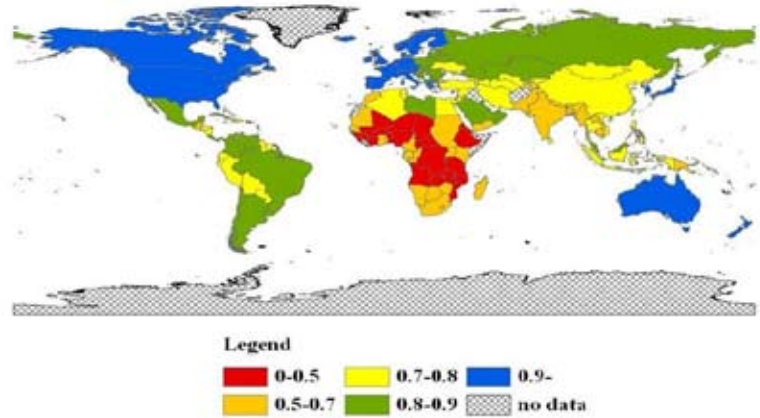


▲ 自宅でインタビューに答える石井教授
(広報ビデオ画面より)

要性を説いた石井米雄教授が、東南アジア地域研究の過去と現在を熱く語る、意欲的な作品。この番組は、一般公開している映像ステーション内の個人用ブースで閲覧できる。

休館日は、日曜日と月曜日。多くの方々のご訪問と閲覧を期待したい。

(文責：柴山 守)



生存基盤指数のひとつの基礎、HDI

G-COE プログラムでは、パラダイム研究会と四つの研究イニシアティブを中心として、「持続型生存基盤パラダイム」の形成に向けて研究活動を進めている。そのなかでイニシアティブ1では、地域固有性を内含した「生存基盤持続型の発展径路」を見出すためのひとつの方途としての「生存基盤指数」作成に着手し、6月にキックオフ会合を開いてG-COEのメンバーを中心に意見交換を行った。

「生存基盤指数」は、それぞれの地域の生存基盤持続性を様々な量的データをもとに指標化するものであるが、それは指標であると同

時に「生存基盤持続型の発展とは何か」についての、本G-COEプログラムからのひとつの態度表明ともなるものである。その作成において念頭に置いているのは、国連開発計画 (UNDP) による「人間開発指数 (HDI)」および British Columbia 大学の William Rees および Mathis Wackernagel による「エコロジカル・フットプリント」であ

る。「生存基盤指数」では、地球圏 (Geosphere)・生命圏 (Biosphere) を中心とした環境関連指標と、人間圏 (Humanosphere) を中心とした人間関連指標を統合することで、両者のもつ問題点を乗り越えることを目指している。

(文責：木村 周平)

『三印法典コンピュータ総辞用例索引——改訂版』出版

2008年11月本研究所は、タイ語『三印法典コンピュータ総辞用例索引——改訂版』(Computer Concordance of The Law of Three Seals, Revised Edition) を出版した。本改訂版は、タイ国王立研究所で編纂された『三印法典』に基づく総辞索引(1巻1,026ページ)で、見出し語19,579語に対する、すべての用例を掲げている。また、一般に普及している『三印法典』タマサート大学本(3冊本)のコンピュータ総

辞用例索引が、本改訂版の付録として添付されたCD-ROMに含まれ、PC上でのデータベースとして利用できる。このCD-ROMでは、王立研究所版冊子体の索引をも検索することができ、利用者にとっては便利であろう。本改訂版の出版は、1990年に編纂した『三印法典』クルサー本(廉価版)のコンピュータ総辞用例索引 Computer Concordance of The Law of Three Seals (5分冊、3,850ページ、23万9千用例、タイ



国 Amarin Publications)につづくもので、タイ国の歴史、政治、社会、文化、言語の研究に貢献するものであると確信している。本改訂版は、バンコクの Kori Planning Co. Ltd (<http://www.koriplanning.com/>)にて頒布されている。

(文責：柴山 守)

Colloquia

“Area Studies in a Global Age: A Perspective from Southeast Asia,”
by Goh Beng Lan
May 26, 2008

This paper addresses the crisis of area studies from a Southeast Asian perspective. It argues that the progressive critique of area studies is underpinned by epistemological imperatives of a Euro-American style of knowing which may not have universal relevance to non-Western models of area studies. Using a picture of human science practices in Southeast Asia gathered from workshops held between 2002 and 2004, this paper presents a Southeast Asian perspective on area studies as a useful analytical paradigm for grasping different ways of inhabiting the world and contributing to multi-directional scholarships on what social scientists like to call history, society, culture, economy and politics.

“Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland,”
by Ishikawa Noboru
June 26, 2008

“Nationalism” is a contentious abstraction, generally treated as something “imagined” or otherwise located on maps, in flags and other symbols, and in collective memory. My ethnographic attempt restores the na-

tion to the social field from which it has been abstracted. The study looks into the boundary separating Malaysian from Indonesian territory in western Borneo and explores how states materialize their territoriality and how people strategically situate themselves as members of a local community, nation and ethnic group. With special focus on a set of questions about the construction and evolution of the national space, the research delineates the resonant interactions between nation-state and borderland society both as history and as process.

“Regional Integration the East Asian Way: Some Preliminary Considerations,”
by Paul Close
July 7, 2008

The colloquium presentation was about the process of regional integration towards an East Asian Community (EAC) around ASEAN, ASEAN Plus Three (APT) and the East Asian Summit (EAS) in comparison with and in relation to European integration around the development of the Europe Union (EU). Attention was drawn to the competing discourses on East Asian integration, including with regard to the geo-political scope and institutional depth of the evolving EAC. It was argued that, as with European integration, various historical, cultural and other factors may impede

East Asian integration, but will not prevent the eventual construction of a supranational EAC. What is decisive in determining European and East Asian *de jure* (legal, constitutional and institutional) integration are the interests, aims and agendas of social compacts of political and economic players, the power and control of which is rooted in the political-economy, that sphere of social life which is being elevated from the nation-state plane to the regional and global planes in accordance with the processes of *de facto* regional integration, on the one hand, and globalization towards a single global social space, on the other.

“Alcohol, Expression of the Divine,”
by Ang Choulean
September 24, 2008

When I first came in Japan in 1996, I was struck by the presence of barrels of sake in different parts of Shinto shrines. I knew that alcohol was sometime used in ritual and that it was a widespread practice, but not to this extent. Gods cannot be drunkards, there must be other reasons! This was my first reaction.

It happened that one day, while visiting an ethnic minority group in northeast Cambodia, the question occurred to me again. Like other ethnic groups living in the same region, this group has a totally abstract

conception of the divine. Its people have no anthropomorphic perception of gods (or whatever you call them). For any sort of contact with the divine, people make an alcohol libation, systematically saying a short prayer. I asked an old man what or who he was thinking of when he said this prayer. This was his answer: "I speak to the alcohol." It then became clear to me that there is some connection between alcohol and the divine, maybe even more than a connection.

This colloquium aims to pursue this question.

「アーユルヴェーダのグローバル化——現代インド、アメリカ、日本における実践と理論の相互関連性からの検討」
加瀬澤 雅人
2008年10月23日

南アジア地域固有の民族医療であ

るアーユルヴェーダは、今日では世界に拡大し、それぞれの地域で新たな解釈が加えられ実践されている。アメリカや日本ではどのように認識され、どういった実践がなされているのだろうか。また、我々はこの医療にたいして何を期待し求めているのだろうか。本発表では、日・米・インドでのこの医療の実践を比較検討し、その背後にある医療や「癒し」をめぐる社会のあり方を検討してみた。

Visitors' Views

Winter and Spring in Kyoto



Stephen J. Leisz

We arrived in Kyoto as snow flurries were falling on the last day of January 2008. Since applying for the Visiting Research Fellow position in March 2006 and finding out that I had been accepted later that year, my wife and I had been looking forward to this day. Our two year son also seemed excited, but his excitement seemed to be more about seeing the snow and possibly playing in it, than for being in Kyoto!

Within days of our arrival we had settled into our apartment in Shugakuin and started to explore the city. At first I walked and took the train to the Center for Southeast Asian Studies, then as the weather got nicer, I bought a bicycle and rode in the early morning. I enjoyed finding the small back streets between our apartment and the center and wandering down them on my bike early in the morning. At the same time we bought my bicycle, we also bought one for my wife with a baby seat on it. And we registered our son for preschool.

During the week, my wife would take our son to school and then she joined in a Japanese language class or a flower arranging class, depending upon the day, at the Shugakuin apartments. So, we all became immersed in different aspects of life in Kyoto. On weekends we took

advantage of the bicycle-friendly aspects of Kyoto to visit parts of the city and different sites within the city. We made our way to the Golden Pavilion, to Nijo Castle, to the Imperial Palace and the park surrounding it, to Shimogamo Shrine, and to Ryoan-ji Temple, amongst others. One place that we went to, that our son still talks about, was to see the "big nosed red man" at the end of the Eiden Eizan train line in Kurama. And of course, we loved the cherry blossoms during the spring.

Now that we are no longer in Kyoto, but rather experiencing the winter in Fort Collins, Colorado, we look back on our time in Kyoto and hope to travel to the city again during the fall.

(Visiting Research Fellow)

Quality Is a Japanese Way of Life



Cut Armansyah

This was my first time in Kyoto, Japan. As a visiting researcher, I stayed here for six months, from May 1, 2008, to October 31, 2008, and it was a sweet moment in my life.

Everyone who has visited Kyoto will agree that it is one of the most beautiful cities in the world. It has many places to visit, such as shrines and temples with parks, museums, a castle and an imperial villa. I found it very easy to access these places using public transportation, such as sightseeing buses, trains and subways. All of these are clean, comfortable and — most important — on time. A bus, train or subway having its own schedule is rare to find in my country.

The mild weather made me happy to go walking and biking. In my country I never use a bicycle. Unfortunately, this happiness did not last into summer, as my friend in the Center suggested that I not bike in this season, because it is too hot.

One unique aspect of Kyoto is how modern life parallels old traditions. I am very lucky because during my six months here I saw some big festivals — Aoi Matsuri, Gion Matsuri, Jidai Matsuri, and fireworks in the summer. From these I learned that Japan is very rich in

traditions and maintains them proudly.

One story about Japanese pride. On the weekends, I always spent time seeing great places or shopping in Japanese handcraft shops. I have some descriptive words for all these places: clean, comfortable, beautiful, well-arranged. For Japanese crafts, however, I found only one word that applied to all products: high quality. One day, I found some Japanese wooden sandals that I wanted to buy for my family. I tried to bargain down the price, but the shopkeeper said: “This is Japan. No discount for Japanese products. We sell quality.”

A few years ago, I wrote my thesis on Total Quality Management in a library setting. In many references I read that “quality” had become a Japanese way of life. During my six months in Kyoto I saw it.

(Visiting Research Fellow)



Past and Present Memories



George Bryan Souza

Although I have been privileged in being invited to visit and lecture in Japan over the past several years, my six month fellowship at CSEAS gave me the opportunity to live in this fascinating country again after a hiatus of some

39 years! During my first stay, which was also for six months and roughly at the same time of year, I lived in Ube in Yamaguchi prefecture, teaching English, doing research, and getting to know some very interesting people and parts of Japan and their past. While spending three or four days in Kyoto during another stay, I learned of the chance to apply and spend time at CSEAS and gladly leapt at the opportunity!

As a CSEAS fellow, my professional interest was to initiate reading, thinking, and contact with Japanese scholars on a new historical research project “Beyond Silverization,” which deals with the early modern political economy of Asia, especially commerce and maritime trade. The project examines and attempts to create a model of the internal and external market relationships in space and over time between currency circuits and commodity chains. It is difficult to imagine a better venue to start this research, since early modern Japan produced around a third of the world’s silver and today some very exciting scholarship is being done here on the historical experience of Japanese and other Asian economies. My time here was profitable.

In addition and, I think, as important as my professional experience, my stay produced pleasant memories, and some interesting, positive personal reflections and comparisons between the Japan of today and the Japan of 39 years ago. There are memories that I will cherish: the simplicity and complexity of haiku, the early morning observations of cranes in the Kamo River, the foreigner’s interactions with and bemused reaction and understanding of the Japanese and the special place that is Kyoto. Thank you! (Visiting Research Fellow)

Living in the Finest City in Asia



Li Tana

My ANU colleague, Igor de Rachewiltz, is an Italian and an authority on Mongolian history. To him, there are four most beautiful cities in the world, and three of them are in Italy. Coming from an aristocratic family background, and having lived in all the beautiful cities in Italy and settled in the garden city of Canberra for over 40 years, he could be hard to please when it comes to the cities in Asia. The news that I was coming to Kyoto, however, got him excited. "Kyoto is the finest city in Asia," he told me seriously.

The more I see Kyoto, the more I understand why Igor did not make that comment lightly, and why his choice of the word "finest" captured the essence of Kyoto. Kyoto was historically known for its production of naturally-dyed, simple-patterned but highly sophisticated fabrics. To me this city itself is such a piece. Kyoto is elegant and poised, but plain and simple at the same time. I have never seen any city which combines the two extremes like Kyoto.

Riding my second-hand bicycle in the autumn breeze along narrow streets lined with traditional houses will be one of the most beautiful memories of my life. In the library walking among the book shelves, browsing the personal collections of Kuwabara Jitsuzo 桑原隲藏, the leading scholar of the Kyoto School on Asian history, the thought that his very hands once touched these books gives me such thrill. Living in my cozy flat near the Temple of the Pure Land (Jodoji 浄土寺) affords me a chance to sample the Japanese taste of life. It was my good fortune to be granted a visiting fellowship by the Center for Southeast Asian Studies, and I hope more scholars in the world have a chance to enjoy this pure land.

(Visiting Research Fellow)



Kyoto and Its Temples



Thung Ju Lan

It is quite amazing to learn that Kyoto has so many temples and shrines. The tourist map published by the Japan City Hotel Association-Kyoto states that there are 83 temples and 36 shrines. What is

so interesting about these temples and shrines is how many of them are located side by side. For example, a small road enables you to walk through Chion-in Temple then Yasaka-jinja Shrine, or Kurama-dera Temple then Kifune-jinja Shrine (in Kurama, northern Kyoto) in less than 15 minutes. The temples and shrines are also notable for their unique architecture and incredible age (between one hundred and several hundred years old). What I became curious about was not how they were preserved, but who wanted to preserve them. The way I see it, the building materials chosen by the temple and shrine-builders suggest that they were thinking of creating something that would "last long." What kinds of people were these architects of older times? What were their visions of the future? Did they imagine Kyoto surviving for thousands of years after they were gone? Of course it is impossible to know the full answers to these questions today, but I believe it is possible "to feel" them as one looks at the amazing longevity of their creations. Their legacy is not the artifacts themselves, but their vision of eternity that signifies the longing of every human soul for immortality that can perhaps be traced back to the beginning of the human race.

(Visiting Research Fellow)

来訪者

2008年8月12日 Phallapa Petison (マヒドン大学経営学部) ▼8月21日 Cahyono Agus (ガジヤマダ大学 KP4 所長) ▼9月2日 Rahman Md Mizanur (シンガポール大学社会学部研究員) ▼10月15日 Md. Aminur Rafman Khan (JICA 研修員・バングラデシュ) 他1名 ▼11月20日 Gumilar Rusliwa Somantri (インドネシア大学学長)

私の地域研究論

「やくぎになれないのなら、止めてしまえ」。昨夜の飲み会でF先生がこう言い捨て、怒って帰ってしまった、とMさんから聞いたのは、1996年の冬の日である。当時わたしは京大人間・環境学研究科大学院修士課程1年生で、Mさんは東南アジア研究センター（当時）の非常勤研究員だった。飲み会では、地域研究とは何か、が話題になり、「先生たちはそれぞれ自分の専門があった上で言ってるじゃないですか。でも、自分たちにはそれがない」と反駁したところ、「こう言ってから帰ってしまったんや」という。Mさんもわたしも、真意がくみ取れず、弱り切った。

しかし、いまは、わたし自身が、「やくぎになれないのなら、止めてしまえ」と考えるようになった。地域研究論という論題があるならば、その古典的かつ未解決の問いとして、既存の学問体系内のディシプリンと地

域研究をどう位置づけるのかという問題がある。古くからの議論の流れは先達の著書で確認できる。他方、開かれて10年余りになる地域研究の教育現場（大学院）では、地域研究なるものが既存の専門分野とどう関係する／違うのかを問う学生の声が続かない。

地域研究の最大の特徴は、同業者ごとの「世間」のなかで評価を受けることを最大かつ最優先の課題としてきた所与の学問体系による「理解」を打破しようと挑むことにある。そのために、地域研究者は、生態と、歴史と、文化と、国家を含むマイクロからマクロまでの社会環境の総体として存在し、いまこの一瞬も変化している「地域」に身体と視点をおく。しかしこのような説明は、組み連ねた言葉としては的を射ていても、力がない。説得力が薄い。どこかで何度も聞いた台詞で、そんなきれいな事が聞きたいのではない、と学生から

小林 知

突っ込まれる。そしてその時、F先生と同じ言葉が頭に浮かぶ。

「地域」理解をめざす従来の学問的営みの限界を、自身のフィールドワークの経験において認識した瞬間から地域研究が始まる。ある特定の地理的範囲に観察される人間・環境・社会を対象とする各々の分野の専門家が集まったら、おのずと、地域研究者のネットワークが立ち上がるのではない。「やくぎ」であることを是認する瞬間を経ず、旧来の「世間」にのみ頼る者は、そのなかに含まれないのである。（東南ア研 助教）

新しく「私の地域研究論」のコラムを始めました。トップバッターは若手を代表して小林知助教です。これから毎号、スタッフによる地域研究をめぐる思考や所感、「私の地域研究論」をお届けする予定にしていますので、ご期待ください。

連絡事務所だより *Letter from Liaison Office*

バンコクで生き物を見るには...

2008年6～9月の約3カ月間、バンコク連絡事務所駐在員として、バンコクで過ごした。私の専門は海洋生物学であり、主な対象生物はウミガメである。駐在期間中、タイはちょうど雨季であり、残念ながらこの時期はウミガメが少ない。このため私は、駐在業務以外の時間は、専らデータ解析と論文執筆をして過

ごした。通常ならば一年の半分をフィールドで過ごす私である。事務所に籠りっ放しで耐えられるわけではない。このため、ある計画を立てていた。

タイでは、クイーンズ・プロジェクトの一環としてウミガメは厳重に保護されている。各地に保護施設があり、私のカウンターパートである

ラヨン県マンナイ島にある研究施設もその一つである。このプロジェクトの関係で、毎年シリキット王妃の誕生日である8月12日には、仔ガメの放流会が行われている。私は研究の打ち合わせを兼ねて、これに参加しようと画策していたのである。ところが、先方から、「今年は研究施設の移転で忙しいので、放流

奥山 隼一

会を行わない」との返事がかえってきた。私の計画はもろくも崩れ去ってしまったわけである。

そうなると、私の足は自然と動物園・水族館へ向く。幸い、事務所から BTS で 10 分程のところにある水族館があった。バンコク市内のど真ん中にある高級デパート、サイアムパラゴンの地下にあるサイアムオーシャンワールドである。バンコクのデパート地下は、水族館となっていたのだ。東南アジア随一を誇るだけあって、

巨大水槽とそこにいる生物群はすごい。巨大ザメが餌を喰らう様子など、夢に出て来そうな程おっかない。休日には、何度も出向いては水槽に張り付いていた。ぜひとも訪れて欲しいスポットである。

もう一つのおススメが、かのバツポン通りの近くにあるスネークファーム。もともとヘビ毒の解毒剤を作る目的で立てられた場所であるが、ヘビの飼育、展示も行っている。キングコブラのショーも然ることな

がら、そこで飼育されているヘビのラインナップがすばらしい。本当に多種のヘビ類がタイを始めマレー半島に生息していることがわかるし、東南アジアの生物多様性の一端が窺える。毒に関する科学的な展示もあって、生物家が心躍ることは間違いない。

(情報学研究科グローバルCOE助教)

連絡事務所だより *Letter from Liaison Office*

ジャカルタの高級住宅街

相沢 伸広

事務所移転先の予備調査を仰せつかり、私はジャカルタの高級住宅事情について友人に相談した。その時の話を少し紹介したい。現在の事務所があるクバヨラン・バル地区は、メンテン地区とともに、由緒ある高級住宅街として知られる。郊外に、新しい高級住宅地区が次々に開発される中、ここ 5 年ほどで、都市中心部のこの二地区での賃料水準の高騰が顕著となっている。

その理由として、郊外の広大な高級住宅に移り住んだ超富裕層が、再び都心の土地購入に積極的になっていることが挙げられる。交通渋滞が年々悪化する中、二地区の利便性の良さが見直されたのである。クバヨラン・バル、メンテン両地区は、政府高官の公邸も多く、その安全性に

は定評があり、さらに近年の都市問題である洪水の被害にもあっていないことから、さらに人気が高まっている。多くの場合、土地を相続した元高級官僚の家族から、購入しているという。都心部に高級マンションが次々と建設されているのにもこうした背景がある。

購入した土地、家の用途であるが、大まかにいって、半分は投機対象か貸家、もう半分は家族用の住居である。中でも大企業家たちがその子供のために購入し、やがて結婚したときのことを考えて取り置くことも多いという。両地区ともに、需要が多い割に空き家が多いのは、そのためである。ジャカルタ事務所のすぐ近くにも、ブルーバードタクシー・グループの娘の家がある。当の父親が、

やがて子供たちが結婚しても、気兼ねなく遊びに行くため、用意した邸宅である。

「娘が結婚するまで」、という条件で良いのであれば、いくつかいいところがある、と友人は教えてくれた。1990 年代に流行った、ホワイトハウスのような白亜の玄関、大きなプール付きの重厚な豪邸とは異なり、近年建てられた高級住宅は、ガラス張りの機能重視のものが多い。手入れが大変であった昔の家とは違い、最近の新築物件は日本人にもあうだろうと、強く勧められた。もともと、「突然解約されるのが怖いのであれば、京大の誰かがオーナーの子供と結婚しないとね」、とあって友人は笑っていた。

(東南ア研 国内客員研究員)

チョコロさんの思い出

山田 勇



◀真ん中がチョコロさん。
ジョクジャカルタの自宅にて。1986年

激しい雨が降る中、なつかしのチディティロ通りのチョコロさんの家を訪ねた。いつもは美しい笑顔でてくるはずが、家が真っ暗で誰もいない。浜元さんがいろいろやってみるがどうも留守のようである。やむなく、あとのことは浜元さんにたのみ、フローレスへ向かった。

フローレスからもどる日、電話があり、入院しているという。そして、フローレスからバリについてすぐ、チョコロさんが、あの晩、亡くなったという。

古い話になるが、はじめてチョコロさんにあったのは1969年のことである。土屋健治さんと私はセンターの留学生試験をうけ、かれはジョクジャカルタに、私はボゴールにそれぞれ留学した。

半年ほどして、はじめてジョクジャカルタを訪ねチョコロさんにあった。私はそのすぐ下のサルジトさんという初代のガシャマダ大学学長の大きな家にとまっていたので、その時はそれほど大きい家とはおもわず、植えこみの多い日本的な家という感じであった。清楚なジャワ美人というのが最初の印象で、かなり年の違う主人を大事にしていた。

数日間の滞在の間にわれわれは熱っぽく将来のことを語りあった。牛車で銀の町コタグデへゆつくりと訪れ、またプランバナナやポロブドールもみた。大使館から派遣された伊東さんも一緒にいた。

いつもロマンチックな夢を語る土屋さんがとりわけ、目のかがやきが違うのは、チョコロさんのことをいう時であった。いろんな話をきかされたが、一番感動的であったのは、夜土屋さんが明るい電燈のもとで勉強できるように、夫婦はくらい電気でガマンしていたというのである。当時はそれほど電力事情が悪かった。

それからしばらくして、土屋さんは、テーマが見つかった。タマンシスワという組織についてやります、と明るい笑顔で語った。そして、このテーマを選んだ背景には、チョコロさんの影があったらしい。

はじめての海外での生活で、いかにいい人物に出会うかは、生涯の問題である。土屋さんの仕事をするうしろには常にチョコロさんがいた。かれは、論文や本をかく度にチョコロさんに出来、不出来を心の声できいていたのであろう。

土屋さんが亡くなり、また土屋さんが大事におもっていた西村さんも亡くなり、そして今チョコロさんも亡くなった。次々と、いい人が亡くなっていくのはつらいことではあるが、こればかりはどうしようもない。土屋さんが亡くなった時、かれの学生たちはどうするか、心配であった。しかし、心配することはなかった。師を亡くした学生たちは、ずいぶんとがんばり、いい仕事をしていった。土屋さんの心がどこかかれらの中に

宿り、いい仕事をさせていったのであろう。教師というのは、むしろその方の意味が大きいのかもしれない。

フローレスでは、垂直に近いといってもいいような急峻なガケや、大岩のゴロゴロする斜面に、竹で土止めをし、米、トウモロコシ、キャッサバに、ジャンプメンテをうえていた。夕方になるとくらくらした道を野良仕事をおえた一家が、それぞれ薪の束や材木を頭にのせたり、かついだりして延々と歩いている。来年の選挙をひかえ、大通りには各派の旗がなびく。誰にきいても、候補が多すぎてどうにもならないという。

これだけ豊かな資源国で、これだけ勤勉に働く人々がいつまでも貧しいのは、どういうことだろうか。土屋さんならどういふだろうか。チョコロさんなら、多分、何もいわずにこやかにやさしい微笑みを返すに違いない。

何度きてもインドネシアの奥深さはつきることがない。ローラントウカからルンバタへわたる船の5分間の立寄り港で、カチャン売りの子らがワーッと入り、サッとひきあげた。沈香は採取から植林の時代になった。どこにでもがんばる人々が未来へのよりよい兆しをみせてくれた。(1975-80年 東南ア研・助手

1988-2006年 助教授・教授)

離任にあたって——京大地域研究との出会い

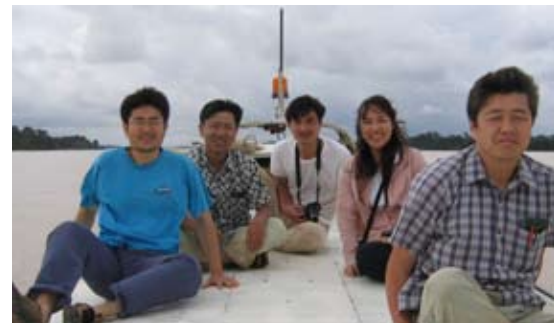
古市 剛久

2007年7月から生存基盤科学研究ユニット研究員として、2008年4月からは非常勤研究員として、合わせて1年4カ月、東南アジア研究所で過ごす機会をいただきました。この間、東南研伝統の研究スタイルが異分野協働による自らの研究地平の拡大にあると教えられながら、比較的短い在籍期間のこともあり、また地球科学分野のライバル達が専門分野の実績を積み上げている中で、具体的な研究枠組みとして自らがそれを推し進めるまでには至りませんでした。しかしこの空気の中で過ごした時間は今後の研究人生の中で必

ずや役立つものであろうと思っています。お世話になりました研究所の皆様、特に河野教授、研究員諸兄にはお礼を申し上げます。

この11月からは大学院アジア・アフリカ地域研究研究科で始まりました大学院教育改革支援プログラム「研究と実務を架橋するフィールド・スクール」での任務に就いています。「実務的マインドを持つ研究者、研究的マインドを持つ実務家の育成」がプログラムの理念と聞き、かつて途上国援助実務に携わった者として多少の独自性を発揮できるやりがいのある仕事であろうと考えた結果で

す。京大地域研究と繋がる別の細い糸を見出したという思いもありまして、この細い糸もより太く育てていければと思っています。



▲マレーシア・サラワク州ラジャン河にて（左端筆者）

研究会報告

◆ Special Seminar

Stephen J. Leisz (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Land Use Change in North-Central Montane Vietnam: Using Landsat TM Chronosequences to Classify and Characterized Land Use Change,” June 18. ▼ Tazul Islam (Visiting Research Fellow, CSEAS) “The Grameen Bank and the Bank Rakayat Indonesia: Sharing of Experiences between the Two Microfinance Giants,” July 10. ▼ Ang Choulean (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Related Beings:

Rice and Human,” July 17. ▼ Paul Close (Visiting Researcher, CSEAS) “Towards an East Asian Community (with thanks to Charles Darwin and Karl Marx),” October 10.

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会 第37回：5月16日 片岡 樹 (ASAFAS) 「『タイ仏教徒』の隣人たち——山地民および中国系住民からみた大陸部東南アジアの宗教論」 ▼第38回：9月19日 長谷千代子 (九州大学) 「中国における文化言説と少数民族——徳宏タイ族の

日常実践にみる『文化の政治と生活の詩学』」 ▼第39回：11月21日 多和田裕司 (大阪市立大学) 「現代マレーシアにおける『イスラーム化』——イスラームの制度化という視点から」

◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会 第136回：(共催：G-COE「生存基盤持続型の発展を目指す研究拠点」イニシアティブ2「人と自然の共生研究」) 6月27日 フォンリュブケ 留奈子 (オーストラリア国立大学) 「タイ北西部における山村農業の変遷——伝統的農耕に及ぼす市

場志向要因の影響」 ▼第137回：10月17日 辻本泰弘（京都大学）「マダガスカルのSRI 稲作——実態と発展可能性」

◆「アジアの政治・経済・歴史」研究会
第1回：6月24日 Richard von Glahn (University of California, LA) “Multiple Currency Circuits and the Origins of the Paper Money Standard in China in the 12th-13th Centuries”

◆2006年ジャワ中部地震ゲシアン村プロジェクトの報告会

5月22日（主催：科研費プロジェクト（萌芽）「防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を目指して——コミットメントの経験から」）浜元聡子（CSEAS）「研究者が災害救援活動の現場にいる戸惑いから考えること——2006年ジャワ中部地震ゲシアン村プロジェクト中間報告」

◆「映像なんでも観る会」研究会
第20回：5月19日 「フィールドとの『関わり』と映像」監督：光武計幸 『灰の中の未来——二十世紀最後のアエタ族』（1999） ▼第21回：6月5日 監督：Rory B. Quintos 『Dubai』（2005） ▼第22回：10月31日 監督：エイアル・シヴァ 『スペシャリスト——自覚なき殺戮者』（1999） ▼第23回：11月12日 監督：マルジャン・サトラビ 共同監督：ヴァンサン・パロノー 『ペルセポリス』（2007）

◆「大陸部新時代」研究会
第3回：7月5～6日 【5日】 高橋宏明（東海大学）「フランス植民地期カンボジアにおける中央官僚

の特質について」 ▼傘谷祐之（名古屋大学）「フランス植民地期カンボジアにおける司法組織改革——1863年から1922年までの時期を中心として」 ▼池上真理子（上智大学）「カンボジア国内における少数民族クワイの製鉄業——フランス植民地期史料を中心に」 ▼澤田知香（奈良女子大学）「クメール建築における木造建造物の復元的研究」 ▼羽谷沙織（日本学術振興会特別研究員）「カンボジア古典舞踊教育にみる『クメール文化』の創出」 【6日】 米満 愛（神戸大学）「カンボジア縫製業労働者の職務意識——意欲的労働力を促す要因は何か」 ▼吉田尚史（早稲田大学／精神科医）「カンボジア王国の精神医学・医療についての報告」 ▼石川晃士（名古屋大学）「市場経済移行期におけるカンボジアの農村・農業の変容と農業発展過程に関する研究——バタンバン州の稲作生産システムを事例として」 ▼秋保さやか（筑波大学）「カンボジア農村社会における開発と住民組織——タケオ州トラムコック郡の事例から」 ▼佐藤奈穂（ASAFAS）「カンボジアにおける死別・離別女性の貧困回避と親族ネットワーク」

◆「ネパールにおけるNGOの活動に関する」研究会
（東南アジア研究所共同研究会「農村開発における地域性」と「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」（南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究）の合同研究会）

6月27日 田中雅子（オランダ開発機構（SNV））「岐路にたつ開発NGO——ネパールにおける当事者主権運動のひろがり」と社会的包摂の課題」

◆「農村開発における地域性」研究会
10月15日 Khan Md. Aminur Rahman（リンクモデル推進室課長） Molla Muhammad Hasanul Hoque（タンガイル県カリハティ郡プロジェクト副担当官）『「行政と住民のエンパワメントを通じた参加型農村開発プロジェクト（フェーズ2）」とBRDB,日本での研修」コーディネーター：安藤和雄（CSEAS）

◆「次世代の地域研究」研究会
第7回：10月26日 鬼丸武士（政策研究大学院大学）「英領マラヤにおけるイギリス植民地統治——治安維持に焦点を当てて」 ▼鈴木絢女（政策研究大学院大学）「マレーシア政治の『制度』的転回——ブミプトラの特別の地位をめぐる政治過程の研究」 コメンテーター：左右田直規（東京外国語大学）

◆近畿熱帯医学研究会
第13回：10月4日 角 泰人（結核予防会結核研究所）「熱帯地域の結核の現状」 ▼宮崎圭一郎（財団法人化学及血清療法研究所）「予防接種に関する最近の話題——インフルエンザを中心に」

◆京都人類学研究会
（共催：東南アジア研究所）
10月17日 津村文彦（福井県立大学）「見えないもののリアリティ——信仰へのアプローチ」 コメンテーター：山田孝子（京都大学）

出版ニュース

◆『東南アジア研究』46巻1号

Southeast Asian Studies 46(1)

「北部ヴェトナム銅鼓をめぐる民族史的視点からの理解」西村昌也 ▼ 「ベトナム黎鄭政権における鄭王府の財政機構——18世紀の六番を中心に」上田新也 ▼ 「ラオスの中央地方関係における県知事および県党委員会の権限に関する一考察——ヴィエンチャン県工業局の事業形成過程を中心に」瀬戸裕之 ▼ 「マニラ首都圏におけるムスリム・コミュニティの形成と展開——コミュニティの類型化とモスクの役割を中心に」渡邊暁子 ▼ Participatory Management Structure of Large-Scale People's Irrigation System: The Case of the Soprong Muang Fai System, Northern Thailand. Tassanee Ounvichit; Supat Wattayu; Satoh Masayoshi ▽ 書評 (Book Reviews) Vicente L. Rafael. *The Promise of the Foreign: Nationalism and the Technics of Translation in the Spanish Philippines*. Caroline S. Hau ▼ Mark Bray and Seng Bunly. *Balancing the Books: Household Financing of Basic Education in Cambodia*. Surithong Srisa-ard ▼ 関恒樹著. 『海域世界の民族誌——フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』細田尚美 ▽ 現地通信 (Field Report) 「デモから半年たったヤンゴン」中西嘉宏

◆『東南アジア研究』46巻2号

Southeast Asian Studies 46(2)

Fragments of History, Silhouettes of Resurgence: Student Radicalism in the Early Years of the Marcos Dictatorship. Patricio N. Abinales ▼ Technological Adaptation in the Transformation of Traditional Boats in the Spermonde Archipelago, South Sulawesi. Aziz Salam; Osozawa Katsuya ▼ 「タイ山地カレン村落における稲作の変容——若年層の都市移動との関連から」田崎郁子 ▼ 「悪評をこえて——サラワク社会と『持続的森林管理』のゆくえ」藤田渡 ▽ 書評 (Book Review) 矢倉研二郎著. 『カンボジア農村の貧困と格差拡大』小林知 ▽ 現地通信 (Field Report) 「社会の安定と無主地の消滅」小林知

◆その他の出版物

■河野泰之 (責任編集) 2008. 『生業の生態史』(論集 モンスーンアジアの生態史——地域と地球をつなぐ1) 弘文堂.

◆*Kyoto Working Papers on Area Studies* シリーズ

■ No. 5. (G-COE Series 3) Palanisami, Kuppanan; Jegadeesan, Muniandi; Fujita, Koichi; Kono, Yasuyuki. 2008. *Impacts of the Tank Modernization Programme on Tank Performance in Tamil Nadu State, India*.

■ No. 6. (G-COE Series 4) Yamao, Dai. 2008. *Struggle for Political Space in post-War Iraq: Contending Relations between ex-Exile Ruling Parties and Later-formed Parties*.

■ No. 7. (G-COE Series 5) Ubukata, Fumikazu. 2008. *The Institutional Formation Process of Communal Forest Management in Northeast Thai Villages*.

■ No. 8. (G-COE Series 6) Hayami, Yoko. 2008. *Pagodas and Wedding Vows: Buddhist and Sectarian Practices in Karen State*.

■ No. 9. (G-COE Series 7) Wakimura, Kohei. 2008. *Health Hazards in 19th Century India: Malaria and Cholera in Semi-Arid Tropics*.

◆Bibliographical Series

■ No. 4. パヴィー, オーギュスト. 『カンボジアおよびシヤム王国踏査行』北川香子 (訳). (原著 Auguste Pavie. *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam*. Saigon: Imprimerie du Gouvernement. 1884.) (付) 松浦史明 (訳・解題). 「バンテアイ・ネアン碑文」

■ No. 5. Cut Armansyah, compiled. *CSEAS Collection on Indonesian Socio-Economics and Political Conditions in 1998-2007: A Selected Bibliography*.





Kyoto Review of Southeast Asia Vol.10

Finally, Issue 10 of Kyoto Review is out!
You can access the issue at
http://kyotoreviewsea.org/Issue_10/TOC.html

In this issue we are proud to introduce selected essays originally published in Chinese by the different institutes and centers of Southeast Asian Studies in the People's Republic of China and to add Chinese to our list of languages. The issue carries a "special flavor" that reflects the depth and span of our Chinese colleagues' examination and understanding of the region. These give readers of insight into how Chinese Southeast Asia scholars view the region from their end, especially at a time when their country is becoming a major presence in Southeast Asia.

This special issue was made possible by the collaboration between our colleagues from these institutes and centers (a brief description of each institution is also included in the issue) and the staff of the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University. In our discussions we realized that for the *Kyoto Review of Southeast Asia* to make an impact on South and East Asia, it must broaden its translation base to include Chinese. This we hope will become a permanent feature of all future issues.

(Reported by Patricio N. Abinales)

図書室ニュース



「図書室長期休室のお知らせ」

耐震工事のため、図書室の本館（赤レンガ）は2009年3月25日から11月末（予定）まで閉室します。それに伴い、閉室中の利用範囲が制限されます。なお、マイクロ資料や、現地諸語資料（特別コレクション以外）は、閉

室中もご利用いただけます。また、学外および三部局（CSEAS・ASAFAS・CIAS）以外の部局の利用者のみなさまは、請求番号がⅢの図書、Ⅰの雑誌（IJ1～IJ5）を、三部局の皆様はレファレンス資料（IE、IA、ID、IS、IY、

IB）と特別コレクションを2月6日までに返却いただくよう、お願いいたします。大変ご迷惑をおかけしますが、よろしく申し上げます。

（図書室長：北村 由美）

お詫びと訂正

ニューズレター No.57 と No.58 に以下の誤りがありました。お詫びして訂正します。

No.57（2007年12月1日発行）4ページ「京都大学インドネシア同窓会（HAKU）が発足、11月総会開催」の記事中、「海外初の京都大学同窓会にあたる。」という一文は事実と相違しますので、削除させていただきます。

No.58（2008年5月1日発行）24-25ページ

「出版ニュース」の記事中、Kyoto Area Studies on Asia シリーズ No.14、信田敏宏（Nobuta Toshihiro）著の書名 *Development and Islamization among the Orang Asli* は正しくは *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli* でした。信田敏宏著『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』は2006年度東南アジア史学会賞受賞でした。

2008年12月1日発行

発行 〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

Tel. 075-753-7344

Fax. 075-753-7356

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 岡本正明・米沢真理子

編集補佐 小林純子・設楽成実